キューピッドの神性の喪失とノリッジの巡幸

大　芝　香　織

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第五十八号抜刷

2022（令和４）年３月

キューピッドの神性の喪失とノリッジの巡幸

大　芝　香　織

1．序

1558 年 11 月 17 日にエリザベスはイングランド女王として即位した。エリザベスがイングランドの女王として即位した際、重要となったのは、イメージ作りである。当時のイングランドにおいて、女性君主のイメージは良いものとは言えなかった。その大きな要因は、エリザベスとは異母姉妹であったメアリー１世の統治による。メアリー１世は、カトリック教徒であり、父ヘンリー８世と異母兄弟のエドワード６世と続いたプロテスタント教国であったイングランドを再びカトリックの国へと戻すという政策のもと、プロテスタント信者に対し、異端者の裁判を行い、さらには、スミスフィールドではプロテスタント信者に火刑を行った。また、スペインのフィリップ２世と結婚し、イングランドの外交政策に対する彼の征服を認め、その結果、イングランドの領土であったフランスのカレーを失った。イングランドの人々の間では、カトリック教徒に対してだけでなく、女性の支配者に対しても敵意が生じ、女性の支配者の特性と正当性に疑念が生じた。このような状況下で、エリザベスは女王となった。イングランド国内に生じた女性支配者に対する疑念を払拭するための一つの策として、君主の神性を強調する必要があった（Hackett 38-40）。

君主の神性を強化する必要性と共に、エリザベスが行わなくてはならなかったのは、メアリー１世によってカトリックの国となったイングランドをプロテスタントの国に戻すことであった。エリザベスはイングランドの君主であると同時に英国国教会の長であった。

女王のイメージ作りそして、政治的意図を暗示する役割を担っていた一つ

が余興である。スティーブン・グリーンブラッド（Stephen Greenblatt）はエリザベスの権力の行使は彼女の虚構の使用と密接な関係があると述べている（qtd.in King 229）。

特に女王が毎年夏に行っていた巡幸での余興はロンドン市民以外の国民に女王の権力の誇示と政治的意図を示す機会となっていた。即位当初、後継者を生むことを期待されていたエリザベスだが、即位して 20 年が経過すると、エリザベスが子どもを産まないかもしれないという可能性を人々が受け入れ始める。1578 年から 1582 年のテクストには、巡幸の余興における移行が示されている。それは、後継者を産まないエリザベスが、永遠の処女として祝われるということである（Hackett 95）。それと同時に生じていたのは、処女、貞節と対となる愛の神、キューピッドの否定ではないだろうか。

本稿では、エリザベスが即位して 20 年経ったノリッジでの巡幸、さらには、トマス・チャーチヤード（Thomas Churchyard）が考案した余興である「貞節の余興」（‘The Shew of Chastitie’）[1] のキューピッドの敗北と堕落、そしてその意図について論じたい。

2．ノリッジの巡幸

巡幸とは、主に君主のイメージ作りのための行事であったが、エリザベス女王は夏にロンドンを出て、人々の前に姿を見せることを好んでいた。巡幸は、女王の個人的な人気を確立し、維持するためのものであり、この政策は成功していた。女王はほぼ毎年、行けるところはどこへでも巡幸を行い、それは 1570 年代の終わりまで続いていた。しかしながら、女王は決して南西、あるいはスタッフォード州より先に行くことはなかった。また、イングランドの外には行かなかった（Dovey, Introduction 1）。

巡幸には前もって、多くの準備が必要であり、計画もまた柔軟なものでなくてはならなかった。女王の好み、天候そして、伝染病などが原因で頻繁に変更されたからである。巡幸に関する決定は女王が下すが、巡幸の計画自体は宮廷の主要人物たちを含む枢密院に任されてた。特に宮内長官、副宮内長

官が詳細な準備と日々の管理を担っていた。巡幸の間も国事を行わなくてはならないため、休暇ではなかった。巡幸には枢密院のメンバーや宮廷人たち、ほかにも役人たち、召使たちが女王に同行していた。女王は、各地の権力者の邸宅に滞在したが、ほかの者たちは、快適な家に滞在できるとは限らなかった。女王が数日滞在した屋敷の所有者は女王に贈り物をし、同様に、宮廷人たちにも贈り物をしていた。その費用は莫大で、女王の訪問により、所有者が出世することもあれば失脚することもあり得た。しかしながら、女王が滞在した都市にとっては、女王の訪問は名誉と機会をもたらすものであった。代わりに、人の労力と金銭の消費を求められた。市長や組合、ギルドによる挨拶、饗宴、そして余興が行われた。都市の通りは整備され、建物は塗装され、そして、市民には新しいガウンが与えられた。余興の準備のために、宮内長官から事前にプロの作家が送られた。それらはすべて莫大な費用をかけた一大イベントだった。不随的な費用がかさむこともあった。贈り物や賄賂、そして食事や宿泊を求める役人たちや、使用人たちの侵入により、所有地は損傷され、物がなくなることもあった。より深刻なことは、イングランド最大の都市にして、人口の過密化が進んでいたロンドンから、人が移動することにより、伝染病が急激に発生することであった（Dovoy, Introduction 2-6）。

1578 年の夏の巡幸においても、状況は同じであったようである。イースト・アングリアへの巡幸の計画は、すでに同じ年の 5 月には概要が知られていた。6 月半ばまでには、計画は十分に具体化されており、ノリッジには 8 月に女王を迎えるように警告がされていた。その後、トマス・チャーチヤードが女王の前で上演する、いくつかの余興を作り上げるためにノリッジへと送られた。彼は、7 月 25 日頃に到着し、任務に従事したようである（Dovoy 17）。

ノリッジでの余興はチャーチヤードが作り、バーナード・ガーター（Bernard Garter）とヘンリー・ゴールディンガム（Henry Goldingham）は市長たちの挨拶、演説と余興も書いた。チャーチヤードの肩書は、兵士、自称宮廷人、翻訳家、公共の余興のまとめ役など多くある。ノリッジでの

余興のほかに、1574 年に女王がブリストルへ訪問した際にも、余興を考案していた。一方でガーターについてのキャリアはほとんど知られていない（Appendix 2 243）。

彼らは余興を考案したが、やはり、天候や急な変更により、予定通りに行なうことはできなかった。ノリッジでの巡幸の様子は、ガーターの *The Ioyfull Receyuing of the Queenes most excellent Maiestie into hir Highnesse Citie of Norwich*（以下 *The Ioyfull* ）とチャーチヤードの *A Discovrse of The Queenes Maiesties entertainement in Suffolk and Norffolk*（以下 *A Discovrse*）に記録されている。ガーターの記録には、市長たちの演説の内容とガーターが考案した余興、ゴールディンガムによる余興、その日に何が行われていたのかが記録され、チャーチヤードの記録には、読者へという前書きと「貞節の余興」を含むチャーチヤードが上演する予定であった余興が記されている。以下に簡潔にノリッジでの巡幸がどのように行われていたのかを記す[2]。

エリザベス女王は 8 月 16 日の午後 1 時に市長と彼の側近たちにハートフォードブリッジで出迎えられる。市長の歓迎の演説のあと、イングランドの神話の王が女王にスピーチをする予定であったが、にわか雨により、実現することはなかった。女王は、そのまま、聖ステファンズゲートを通って、市内に入った。門の内側ではガーターが用意した余興が行われた。その余興では、男性、女性、そして子供たちが織り物や編み物をし、紐で装飾し、糸を紡いでいた。女王はそこから、市場へと移動し、チャーチヤードによって作曲された歌が唱歌隊によって歌われる。その後、ガーターの書いた小曲を音楽隊のうちの一人が歌い、歌が終わると女王は大聖堂で礼拝をした。翌日である 8 月 17 日の日曜日は、安息日であった。月曜日は、夕食前にチャーチヤードが余興で女王をもてなした。その余興のなかではマーキュリーが馬車で現れ、女王にスピーチをした。悪天候のため、その他の余興は火曜日まで延期された。火曜日に、チャーチヤードは夕食へと向かう女王に、「貞節の余興」を上演した。水曜日にチャーチヤードと俳優たちはサリー伯爵の邸宅の裏戸をさまよっていた。そこで女王が夕食をとっていたのである。

チャーチヤードはもう一つの余興を上演する機会を待ち望んでいたのだが、女王が顔を出すことがなかったため、諦めて帰宅しなくてはならなかった。8 月 21 日の朝、チャーチヤードは再び、余興を上演しようと試みたが、突然の雷雨により、余興の計画だけでなく、多くの高価な小道具までも台無しになった。その夜、ゴールディンガムは、余興を行い、余興の中でマーキュリーがプレゼンターとして現れ、古代の神々が女王へ贈りものをした。8 月 22 日金曜日に、女王がノリッジを発つ。聖ベネディクトゲートを通って女王が出発する際、唱歌隊が女王のために歌を歌い、チャーチヤードは妖精の衣装で着飾った少年たちとともにダンスをした。市長であるロバート・ウッド（Robert Wood）が女王に別れの演説をする予定であったが、時間の都合上、演説を見合わせるよう説き伏せられ、女王は彼の演説の原稿を受け取り、骨折り賃として、彼をナイト爵に叙することにした。

ノリッジの巡幸においても、天候等に左右され、女王の前で上演できた余興とできなかった余興がある。役者たちは練習や準備をしても結局、上演する機会を得られないこともあった。市長の演説においても、同様で時間の都合上、練習した演説を披露できないこともあった。

1578 年の夏の巡幸についてデビッド・ローデス（David　Loades）は、エリザベス女王の政治的なスタイルのとても良い例となっており、独特のものであった。あるいは別格のものであったと述べている。女王がとても喜び、女王がまさに望んでいたものを与えていたからである（Forward　12）。チャーチヤードも *A Discovrse* の中で、出版の目的を以下のように述べている。

> I haue presented you with a little Booke, that makes not only report of the noble receiuing of the Queenes Maiestie into Suffolke and Norffolke, but also of the good order, great cheere, and charges that hir highnesse subiectes were at, during hir abode in those parties. And bycause I sawe most of it, or heard it so credibly rehearsed, as I know it to be true, I meane to make it a mirror and shining glasse, that al

the whole land may loke into, or vse it for an example in all places (where the Prince commeth) to our posteritie heereafter for euer.(292)

上記のチャーチヤードの記述から、女王によるノリッジの巡幸は、成功であったことがわかる。また、ガーターの *The Ioyfull* がエリザベス女王のノリッジの訪問を終えてわずか8日後に、チャーチヤードの *A Discovrse* が3週間後の9月20日に書籍出版業組合記録に登録されていることからも、ノリッジの巡幸が今後のエリザベス女王の巡幸を行うにあたり、手本となるものであったことが推測できる（Appendix 2 243）。

では、なぜ1578年の巡幸にノーフォーク州とサフォーク州が選ばれたのであろうか。その理由の一つは、宮廷が目論んでいた巡幸のもう一つの目的にあった。女王に同行していた枢密院が滞在先の有力者たちの宗教上の信仰を精査していたのだ（Dovoy 39）。ローデスはイースト・アングリアで女王が巡幸を行なった理由として、1578年当時、ロンドンの次にイングランドで繁栄していた都市であった、ノリッジがあること、さらには、ノーフォーク州とサフォーク州が25年前のメアリー1世の統治下ではメアリー1世に政治的な支援を与えていたこと、カトリック教徒のノーフォーク伯の逮捕と処刑からわずか6年しか経過しておらず、ノーフォーク州には国教忌避者とピューリタンの両方が多くいる場所であったことを挙げている（Forward 11-12）。

さらに、ジラ・ドボイ（Zillah Dovoy）によると、ノーフォーク州とサフォーク州は多くの主要なカトリック信者の家があり、彼らは古い様式を諦めていなかった。また、ノリッジの主教であるエドマンド・フリーク（Edmund Freak）がピューリタンを厳しく罰する一方で、国教忌避者たちに対しては職務を全うしていないという疑惑があり、巡幸を利用してこれらの問題に対処し、反体制派の身元と居場所の情報を与えることを企てていたのだという。事実、巡幸の間に何人かの国教忌避者のメンバーが召喚されていた（16, 76）。

ノーフォーク州とサフォーク州への女王の巡幸には女王のイメージ作り

と、国教忌避者の特定や召喚という目的があったのであれば、チャーチヤードが女王の前で上演した「貞節の余興」には、どんな意図があったのだろうか。また、一体何が、女王を喜ばせ、ノリッジの巡幸が成功したと言えるのだろうか。事項では、「貞節の余興」の出典であるペトラルカの「貞節の凱旋」[3] との差異に着目し、キューピッドの扱い方を中心に余興の意図を考察する。

3．ペトラルカの「貞節の凱旋」とチャーチヤードの「貞節の余興」

チャーチヤードの「貞節の余興」は女王がノリッジに滞在中の火曜日に上演された。あらすじは以下の通りである。天から追放されたヴィーナス（Venus）とキューピッド（Cupid）が地上を歩いていると、哲学者に出会う。哲学者はヴィーナスとキューピッドがどこから来たのかを尋ねる。ヴィーナスとキューピッドは自分たちが何者であるかを答えるが、哲学者は嘲笑う。ヴィーナスは怒り、哲学者と論争を始める。キューピッドは怒ったヴィーナスから逃げ、宮廷へ向かう。宮廷で、女王に助けを求めるが、女王からは助けも助言も得られなかったため、キューピッドは再び地上へと戻った。キューピッドがこの世をさまよっていると、貞節（Chastitie）と彼女の侍女たち（Modestie, Temperance, Good exercise, Shamefastnesse）に出会う。貞節は、侍女たちと共に、りっぱな馬車に乗ったキューピッドに出会うと、キューピッドを彼の座から追い出した。キューピッドの華麗な行列を制圧し、彼の偽の神格とマントを台無しにし、そして、弓と鉛の矢と金の矢の入った矢筒をとりあげた。そして、キューピッドを追い払うと自らが馬車に乗り、何が起こったのかを詳細に物語った。そして、女王が最良の人生を選ぶように言い、女王にキューピッドの弓を与え、女王が気に入る人に矢を射るよう伝えた。そして、貞節は権力の神のもとへ出発した。キューピッドはこの世をさまよった。そして、気まぐれ（Wantonnesse）と放蕩（Riotte）に出会う。キューピッドはここでも不当な扱いを受け、邪悪な人々の手に落ちる危険にさらされる。再び、哲学者がやってくる。哲学者はキューピッド

に対し、天にほかの神々がいると主張することがいかに冒涜的であり、間違っていることか、そして、唯一の神がすべてを支配しているということを伝える。そこへ再び気まぐれと放蕩がやってきて、キューピッドは彼らと一緒に去ってしまう。哲学者は悪習と愚行がよりよい結果とならないことを気まぐれ、放蕩、そしてキューピッドによって示されたことを伝える。最後に、貞節の侍女たちが貞節な生活がいかに素晴らしいかを歌う。

チャーチヤードの「貞節の余興」についてヘレン・ハケット（Helen Hackett）は女王が結婚の称賛あるいは貞節の称賛のどちらを喜ぶであろうかが、とても不確かであったことを示していると述べている。女王に彼女が好む夫の選択を託しているが、この余興はキューピッドとヴィーナスを異教の神として非難する点においては貞節を称賛するというスピーチを伴って進行している（96）。また、ジェーン・キングスリースミスは（Jane Kingsley-Smith）は、ノリッジでの巡幸は貞節を強調することにあると述べているが、それと同時に、ヨーロッパの結婚市場において女王自身で選択する権利が与えられていると主張する（108）。

ハケットとキングスリースミスの両者がチャーチヤードの余興が女王の貞節を強調している一方で、女王に結婚相手の選択を与えているという主張するのは余興の中での貞節の以下の台詞ゆえである。

Then sith（ô Queene）chast life is thus thy choyce,
And that thy heart is free from bondage yoke,
Thou shalt（good Queene）by my consent and voyce,
Haue halfe the spoyle, take eyther bowe or cloke.
The bowe（I thinke）more fitte for such a one
In fleshly forme, that beares a heart of stone
That none can wound, nor pearce by any meane.
Wherefore take heere the bowe, and learne to shoote
At whome thou wilt, thy heart it is so cleane,
Blind Cupids boltes therein can take no roote.（307-308）

貞節は、女王に最良の人生を選ぶよう言い、女王にキューピッドの弓を渡し、女王が好む人物に矢を射ることを覚えるように伝えている。女王自身は矢で傷つけられることはない。これは、エリザベスの処女性を称賛しつつ、彼女が好む夫の選択を女王に託していることを示している。

キングスリースミスは、上記の貞節の台詞により、女王の貞節を強調することで、フランスの大使たちに警告するという意図があったと述べている。この巡幸の2か月前からフランスの大使たちがフランスのカトリック教徒であるアンジュー（Anjou）伯との結婚を審議するためのためイングランドを訪れており、ノリッジの巡幸にも彼らは同行していた。少なくとも、「貞節の余興」が上演された前日の余興は見ており、サリー伯の家で女王と食事をしていた。チャーチヤードが職業軍人であり、ノリッジで女王の前で上演する娯楽を作るために宮廷から派遣されていたこと、宮廷ではクリストファー・ハットン（Christopher Hatton）やフランシス・ウォルシンガム（Francis Walsingham）などのフランスの王子と女王の結婚に反対していた好戦的なプロテスタントの派閥に協力的であったことを理由として挙げている（108-09）。

チャーチヤードの「貞節の余興」は女王の貞節を強調し、貞節を称賛してはいるが、女王の結婚の可能性を完全に否定してはいない。おそらく、この曖昧さが女王を喜ばせたのではないだろうか。しかし、チャーチヤードの「貞節の余興」では貞節の勝利や栄光よりも、キューピッドの敗北と堕落の方が際立っているように見える。この余興はペトラルカの「貞節の凱旋」を出典としているが、ペトラルカで描かれる貞節よりもはるかに貞節の出番が少ない。この余興での焦点は、貞節の勝利の表現よりも、キューピッドの神性の喪失であったのではないだろうか。本稿では、「貞節の余興」におけるキューピッドが神性さと力を失う意味と、それを上演することの意図について論じていく。

チャーチヤードの「貞節の余興」の出典であるペトラルカの「貞節の凱旋」は、即位前から結婚に前向きでないエリザベス女王を喜ばせる題材であった。1570年代も後半になると、エリザベス女王が結婚しないという可能性

を宮廷人たちも受け入れる姿勢を見せていく。女王が結婚しなければ、プロテスタントの後継者がいないという問題が生じる。ノリッジの巡幸が行われた 1578 年、女王の結婚をしない可能性を受け入れ始めているという宮廷人たちの姿勢と、結婚を完全には否定できないという状況の中で、余興を上演することになっていた（Hackett　74）。

ペトラルカの「貞節の凱旋」とチャーチヤードの「貞節の余興」ではいくつか大きく異なる点がある。チャーチヤードの余興では、ヴィーナスとキューピッドが天から追放され、キューピッドが地上をさまようという場面から始まることである。余興はキューピッドの独白から始まる。

ALas poore boy, where shalt thou wander now,
I am thrust out of Heauen in despight,
My Mother too beginnes to bend the brow,
For both we walke, as we were banisht quite.
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
A man we met, a father graue and wise,
Who told vs both（if you the troth will know）
We were the drosse, the scumme of earth and Skyes.
Fond paltry Gods, the sincke of sinne and shame,
A leawd delight, a flying fansie light,
A shadow fond, that beares no shape, but name.　（306）

キューピッドは、この時点で母親であるヴィーナスから離れ、一人でさまよっている。そして、すでに神性を人間によって否定されている。一人で弱っているキューピッドの前に、貞節が突然、現れる。そして、キューピッドを馬車から追い出し、キューピッドの馬車を奪う。貞節はキューピッドの翼も弓も矢筒も奪う。「貞節の凱旋」においても、敗北者であるキューピッドは翼、弓、矢筒を奪われるが、それらを奪うのは貞節の侍女であるペネロペとルクティアである。彼女たちがキューピッドの携える弓矢も箙も手折

り、両翼の羽さえももぎとる。しかし、チャーチヤードは貞節自らがキューピッドの翼、マント、弓矢も矢筒を奪い、キューピッドの弓矢と矢筒をキューピッドの車で女王に戦利品として献上する。最も異なるのは、「貞節の凱旋」ではキューピッドが貞節との戦いに敗れているのだが、この余興の中では貞節は、キューピッドと戦わず、襲撃をしている。それにより、キューピッドは自身の神格を示す所持品と特徴を奪われる。

チャーチヤードの「貞節の余興」におけるキューピッドの外見について、キングスリースミスは、不運にもチャーチヤードはキューピッドと貞節がどのような服装であったか、あるいは彼らの馬車がどのようなものであったかの記述はないと述べているが（106）、貞節がキューピッドの翼を奪っていること、マント、弓矢、矢筒を奪っていることから、チャーチヤードの「貞節の余興」のキューピッドが最初に現れたときは翼、マント弓矢、矢筒を持っていたことは明白である。また、余興の中で、再び現れた哲学者がキューピッドに自身の神性を証明せよとけしかけたときの以下の台詞からキューピッドが裸であることがわかる。

> In Heauen? there you trippe, why boy how came you thence?
> You went abroade to take the ayre, and haue bin walking sence
> Like dawes along the coast, O boy, thy proofe is bare,
> In Heauen is but one that rules, no other Gods there are.（309）

上の哲学者の台詞からわかるように、天からやってきたというキューピッドの主張と裸である以外にキューピッドの神性を証明するものがない。そして、天を支配する神は一人のみであり、ほかに神々がいないという哲学者の台詞ゆえに、今や、キューピッドがキューピッドである証拠だけでなく、神であることも否定されている。

その後、気まぐれと放蕩がキューピッドに出会い、彼らがキューピッドを連れ去ってしまう。気まぐれの以下の台詞により、さらにキューピッドの特徴が奪われる。

She sayd, when she had Cupid put to foyle,
She gaue his bowe and shaftes vnto a Queene.
And Cupid streight came running vnto me.
I saw him bare, and sent him bare away,
And as we are in deede but bare all three.（311）

ここでの “She” は貞節を指している。したがって、貞節に追い出された後、キューピッドが裸であったことがここでも言及されており、さらには、気まぐれと放蕩も裸であるということが “as we are in deede but bare all three.” という台詞からわかる。つまり、キューピッドは気まぐれと放蕩との間に外見上の差異がない。

キューピッドが神であることを証明する翼、マント、弓矢、矢筒をすべて失い、気まぐれと放蕩という人物が現れたときに、裸であるというキューピッドの特徴に一つも失う。つまり、気まぐれと放蕩と外見上同じである。子どもという特徴のみが残る。キューピッドは気まぐれと放蕩と共に去り、哲学者が女王に以下の台詞をいう。

NOW world may iudge what fables are, & what vain gods ther be,
What names and titles fondlings giue, to *them* likewise you see,
And that one God alone doth rule, the rest no vertue showe,
Vayne Venus and blind Cupid both, and all the ragment rowe
And rabble of Gods, are fayned things, to make the season short,
As wisedome knowes that wel *can* wey, the worth & weight of sport.
（312）

上記の哲学者の台詞が示す通り、キューピッドの神性というものが真っ向から否定されている。さらに、続く貞節の侍女たちの歌では貞節な生活とみだらな生活とを対比し、貞節な生活を称賛している。

CHast life liues long and lookes
　on world and vvvicked ways,
Chast life for losse of pleasures short,
　doth winne immortall prayse.
Chast life hath merrie moodes,
　and soundly taketh rest,
Chast life is pure as babe new borne,
　that hugges in mothers brest.

Leawd life cuttes off his dayes,
　and soone runnes out his date,
Confounds good wits, breeds naughty bloud,
　and wakens mans estate.
Leawd life the Lord doth loath,
　the lawe and land mislikes,
The wise will shunne, fonde fooles do seek,
　and God sore plagues and strikes.（313）

貞節な生活を称賛するだけであれば、キューピッドの敗北と堕落を描くのではなく、貞節の勝利と栄光を描いた余興にすれば良いように思える。しかし、これにはチャーチヤードの意図があったように思える。

ノーフォーク州とサフォーク州の巡幸は、ノリッジを含めカトリック教徒が残る都市を女王が巡っていた。ノリッジの訪問より先に訪れたユーストン・ホールでの出来事が関連しているのではないだろうか。同じ年の夏、ノリッジの訪問よりも先に、女王はカトリック教徒であったエドワード・ルックウッド（Edward Rookwood）の邸宅であるユーストン・ホールに滞在する。そこでの出来事をリチャード・トップクリフ（Richard Topcliffe）がシュールズベリ伯への手紙で報告をしている。その手紙には、女王がルックウッドの邸宅に滞在した際に、ダンスが行われ、ダンスが終わった後に干し草小屋

から聖母マリア像が発見された。女王はそれを火の中へ入れるよう命じたことが書かれていた。ハケットは、この出来事について、女王の滞在中に干し草部屋から聖母マリア像が発見されるというのは、あまりにも都合が良すぎることを指摘し、おそらく、これは余興の仕掛けのように計画されていたのではないかと主張する。また、余興の中にこのような場面が組み込まれた意図については、エリザベス女王自身が余興の展開に関わりがあろうとなかろうと、女王は象徴として展開されている。聖像を燃やすという行為においては、聖母マリアは偽りの処女として、真の処女であるエリザベス女王により排除される。これにより、エリザベス女王の権威が強化されるのであると述べている（1-3）。

さらに、ハケットは、新たに禁じられたイメージと慣習が再び広がることなく、文化から消される前には、それらが、堕落した、欺瞞的なものであると定義されなくてはならないと述べ、聖母マリアの偶像破壊がその承認となり、エリザベス女王の勝利が可能な限り神々しく強調されなくてはならないと主張している（3）。

ハケットの上記の主張を裏付けるエピソードがメアリー１世の即位後にもある。エリザベス女王の異母姉妹であるメアリー１世が即位した際、彼女はカトリック教徒であった。彼女の政治的ポリシーは父であるヘンリー８世が行った宗教改革により、プロテスタントが国教となったイングランドを再びカトリックの国へと戻すことであった。メアリー１世は、聖ジョージ教会にあった父の遺体を掘り起こし、ヘンリー８世の死後処刑を行ったと言われている（King 184）。メアリー１世の父へ対する個人的な恨みもあるだろうが、父親の遺体をわざわざ掘り起こし、処刑を行うという行為は人々に衝撃を与えるには十分であったであろう。

ユーストン・ホールでの出来事とハケットの主張を基に、チャーチヤードの「貞節の余興」のキューピッドの敗北と堕落が描かれた理由を考慮すると、貞節を強調するためには、やはり、愛の神、キューピッドの敗北と堕落が必要であった。視覚上、キューピッドは翼、マント、弓矢、全てを貞節に奪われ、裸であるという特徴さえも、気まぐれと放蕩の登場により失う。キュー

ピッドに完全な敗北を与え、神性を奪うことにより、貞節の勝利を称えている。貞節が、エリザベス女王を表すとき、キューピッドの敗北はエリザベスの勝利へと変わる。哲学者がキューピッドの行く末を語るとき、貞節がキューピッドから取り上げた馬車が女王の前に運ばれる。これも視覚上、貞節の次にその車にのり、勝者となる人物が処女王エリザベスであるということを暗示しているのではないだろうか。異教の神であるキューピッドの神性の喪失とエリザベスの完全な勝利を演じることにより、エリザベスの貞節の強調、さらには、女王としての権威を強化する意図があった。英国国教会の長であるエリザベスの権威の強化は国教忌避者への警告という働きがあったのではないだろうか。

結

本稿では、1578 年のノーフォーク州とサフォーク州への女王の巡幸において、重要な都市であったノリッジでの巡幸について論じた。エリザベスの巡幸がどのようなものであったかをドボイの考察とガーターとチャーチヤードの記録から明らかにするとともに、エリザベス女王の巡幸の目的が、イメージ作りであるということ、巡幸先での宗教の信仰を精査する目的があったことを述べた。これらの巡幸の目的から、チャーチヤードの「貞節の余興」を読むと、出典となっているペトラルカの「貞節の凱旋」よりもキューピッドの敗北と堕落に焦点が当てられ、貞節が自ら、キューピッドの神性を奪っていることを指摘した。さらに、貞節だけでなく、他の登場人物により、キューピッドの特徴は失われ、キューピッドの神性が全面的に否定されていることを論じた。余興の中でキューピッドの神性を奪う目的は、エリザベス女王の貞節と権威を強調するため、また、国教忌避者に対する警告という働きがあったと結論付けた。

注

[1]：本稿で引用する、トマス・チャーチヤードの *A　Discvrse* 及び『貞節の余興』は "The Queen's Entertainment in Norwich in 1578", Appendix 2. *Norwich 1540-1642: Records of Early English Drama*. Edited by David Galloway. University of Tronto Press,1984, pp.241-330. による。引用箇所には頁数を（　　）内で記している。また、上記からの引証は（　　）内に Appendix 2 と記し、頁数を記している。

[2]：以下のノリッジの巡幸についての記述は注 1 の "The Queen's Entertainment in Norwich in 1578" pp.244-246 を参照している。

[3]：ペトラルカの「貞節の凱旋」については『凱旋』池田廉訳、名古屋出版、2004 年を参照している。

Works Cited

Churchyard, Thomas. "The Shew of Chastitie", *A Discovrse of The Queenes Maiesties entertainement in Suffolk and Norffolk, Norwich 1540-1642,* University of Tronto Press,1984, pp. 304-313.

Dovey, Zillah. *An Elizabethan Progress:The Queen's Journey into East Anglia,1578*. Alan Sutton Publishing Limited, 1996.

Garter, Barnard. *"The Ioyfull Receyuing of the Queenes most excellent Maiestie into hir Highnesse Citie of Norwich" Norwich 1540-1642,* University of Tronto Press,1984, pp. 247-303.

Hackett, Helen. *Virgin Mother, Maiden Queen:Elizabeth I and the Cult of the Virgin Mary*. Palgrave, 1995.

King, John N. *Tudor Royal Iconography : Literature and Art in Age of Religious Crisis*. Princeton University Press, 1989.

Kingsley-Smith, Jane. *Cupid in Early Modern Literature and Culture*. Cambridge University Press, 2010.

Loades, David. Foreword. *An Elizabethan Progress:The Queen's Journey into East Anglia,1578*. By Zillah Dovey, Alan Sutton Publishing Limited, 1996, pp. x-xiiii.

Petrarca, Francesco. *Triumphi*. translated and annoted in Japanese by Kiyoshi Ikeda, University of Nagoya Press, 2004.